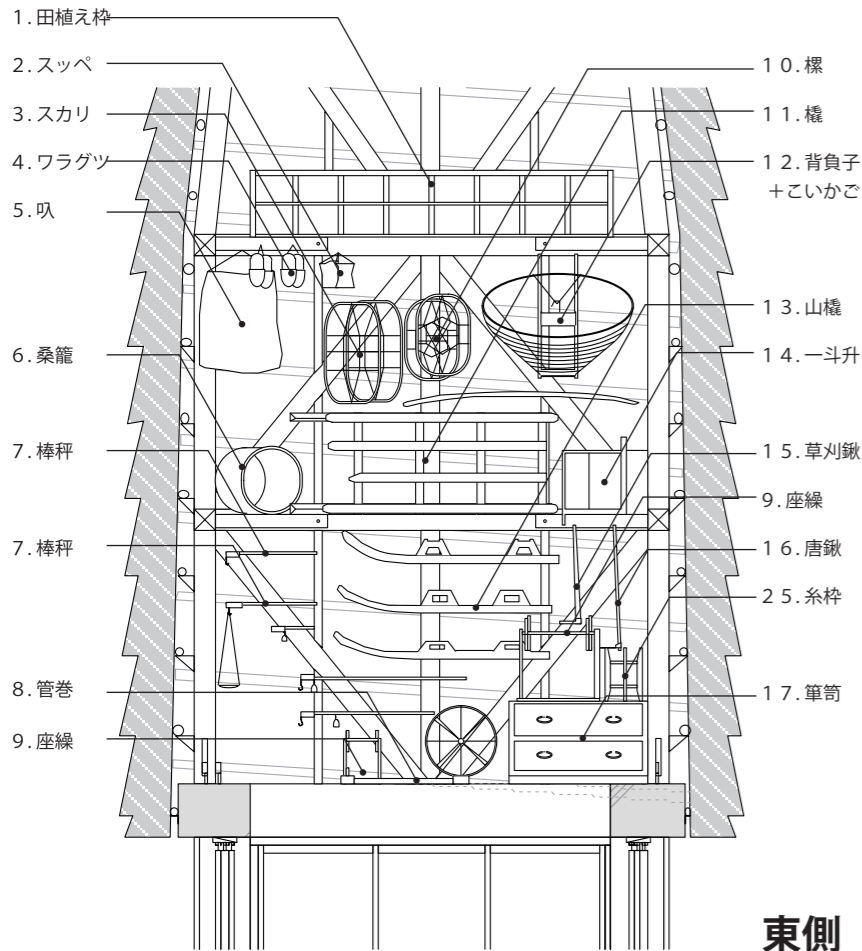
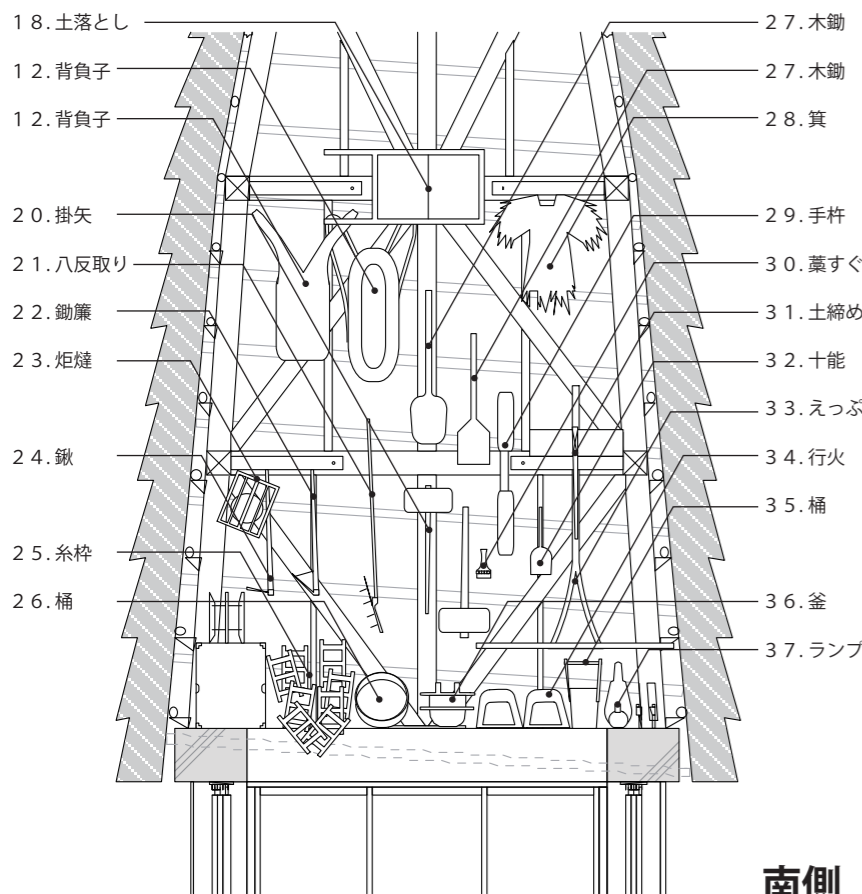


下条地区文化民具説明



東側



南側

1. 田植え杵 (稲格子)

田植えの際に使う道具。格子を転がして苗の間隔を測る道具。

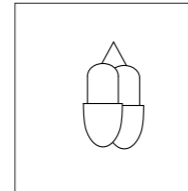
2. スッペ

つま先が特に頑丈にできている靴。そりを引っ張るときには、しっかりと踏ん張れるようなつくりになっている。

3. スカリ

わらじを履いて雪の上を歩くもの。降雪が多い朝の道踏み用で、カンジキ(カチキ)と総称するが、スカリは特に大型で大雪のときに用いる。着用には普通のカンジキを履いた下に重ねてこれをつけ、先につけた緒は手に持って足を上げるのを助ける。

4. 藁靴 (ワラグツ)



冬場に使う履物。現在でいうスリッパとして使われていた。

5. 吠 (カマス)

カマスは、むしろを二つ折にして両端を縫い合わせたもの。主として穀物類の入れ物に使われていた。下条地区では塩や肥料の入れ物としても使っていた。

十日町小唄をもじった下条名物の唄の歌詞に吠が出るほどの名物品。

6. 桑籠 (クワカゴ・クワボコ)

蚕に餌を与えるために桑の葉を集めるための籠として使われていた。

7. 棒秤 (ボウハカリ)

長くて大きなものは米俵を量り、小さなものは生糸や商店で量り売りをする道具として使われていた。

8. 管巻 (クダマキ)

横糸をくだに巻き杼(ヒ)に入れる。蚕の糸を巻くための道具。

9. 座繰 (ザクリ・ザグレ)

蚕の糸を釜で茹でて、それを巻き上げるときに使っていた道具。

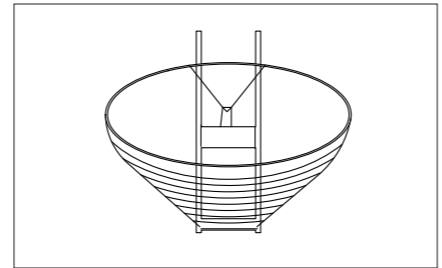
10. 標・櫓・樺 (カンジキ)

道ふみ用、また道のない雪原歩行にも用い、屋根の雪下ろしなどには滑り止めとしても履くので用途により大小さまざまなものがある。輪(山竹)を止めるために、藁や麻縄(頑丈な素材)を使っていた。

11. 櫓 (ソリ)

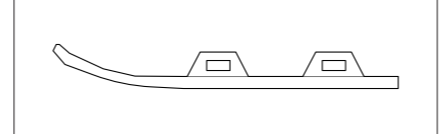
前後のチ(山)に2本の細木をツバイる。さらに縦に細木を結びその上に一本中央に取り付ける。機械櫓(きかいそり)とも呼ぶ。

12. 背負子+こいかご (セナコウジ+コイカゴ)



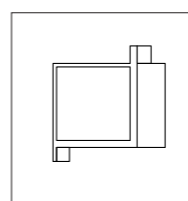
背負子は物を背負うときの背中当て。こいかごは背負子と結んで使い、中には堆肥を入れて運んでいた。

13. 山櫓 (ヤマゾリ)



冬場に雪山から平地へ丸太を降ろすときに使う櫓。重いものを運ぶことができ、櫓自体も通常の櫓に比べ太くて頑丈なつくりになっている。山櫓は大持櫓(だいもちぞり)とも呼ばれている。

14. 一斗升 (イットマス)



昔脱穀された玄米は「みですくってこの「一斗升」で秤量して、俵かカマスに入れられた。1斗=18リットル

15. 草取鋤 (クサトリグワ)

田畑の耕した土をならしたり、畝を立てたり、草取りの作業に使われる。この鋤はとても薄くて軽い。

16. 唐鋤 (トウグワ)

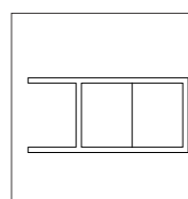
柄が短く小型で刃が厚く頑丈に作られている為、粘性土や伐根、根切り、筍採り等で活躍する。

中国の唐で作られ、使われたいたものが日本に運び込まれたという説もある。

17. 箆笥 (タンス)

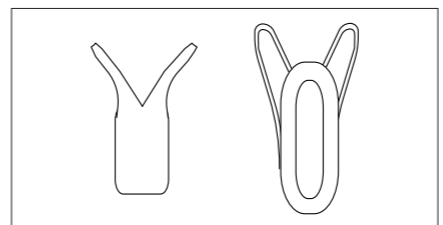
下条の皆さまから提供をしていただいた箆笥。

18. 土落とし (ツチオトシ)



篩(ふるい)のように利用をしていた。用途に合わせて砂利や、砂を分けていた。

19. 背負子 (セナコウジ)



荷を背負うときの背中当て。

20. 掛矢 (カケヤ)

今でいうハンマー。木製でできており、杭を打つときに使われていた。さまざまな大きさがある。

21. 八反取り (ハツタンドリ)

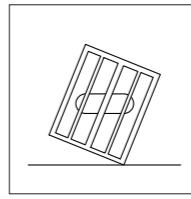
夏場に稲田の草取機で、草を取ると共に土を返して日光の吸収を良くし稲の生育を図った。

一日に八反もの広さを草取りすることができるという名前が付けられているが、実際には難しい。草取り作業がとてはかどることからこのような名前が付いた。一反=991㎡。

22. 鋤簾 (ジョレン)

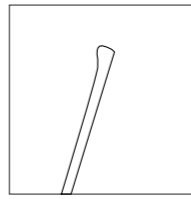
土を麦の根っこにかけたり、ドブの溝さらいをするときに使った。間から水が落ちるようになっている。また、畑の草削りにも使われていた。

23. 炬燵 (コタツ)



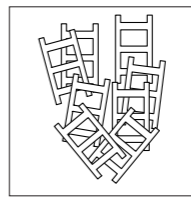
どんな角度に転がっても鉄製の入れ物は上を向いた状態を保つため、オキ(木を燃やしたもの)がこぼれないようになっていた。特にふとんの中で使われていて、寝返りをうっても安心して使える。

24. 鋤 (クワ)



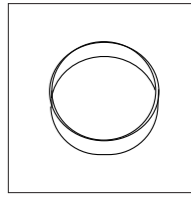
田植えの準備(荒掻き)の後に、田んぼから土を取り出して畦に塗るための道具として使われた。手元に滑り止めのアギがつくられている。

25. 糸杵 (イトワク)



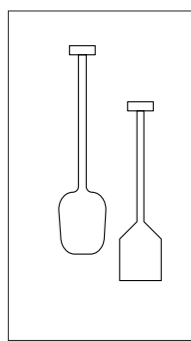
ザクリと一緒に使う道具。蚕の糸を巻き取るためのもの。

26. 桶 (オケ)



漆塗りの桶。何十年もの月日を経ているがキレイに保管をされていた。

27. 木鋤 (コスキ)



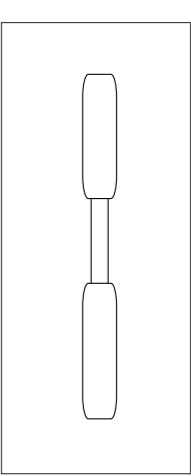
コスキは除雪用具であり、古くからあったと思われるが、商品として作られ始めたのは百四、五十年からと言われる。

28. 箕 (ミノ)



外出時、立ち作業などに使用された。軽さと通気性の良さが特徴。上下が分かれるようになっているものもある。

29. 手杵 (テギネ)

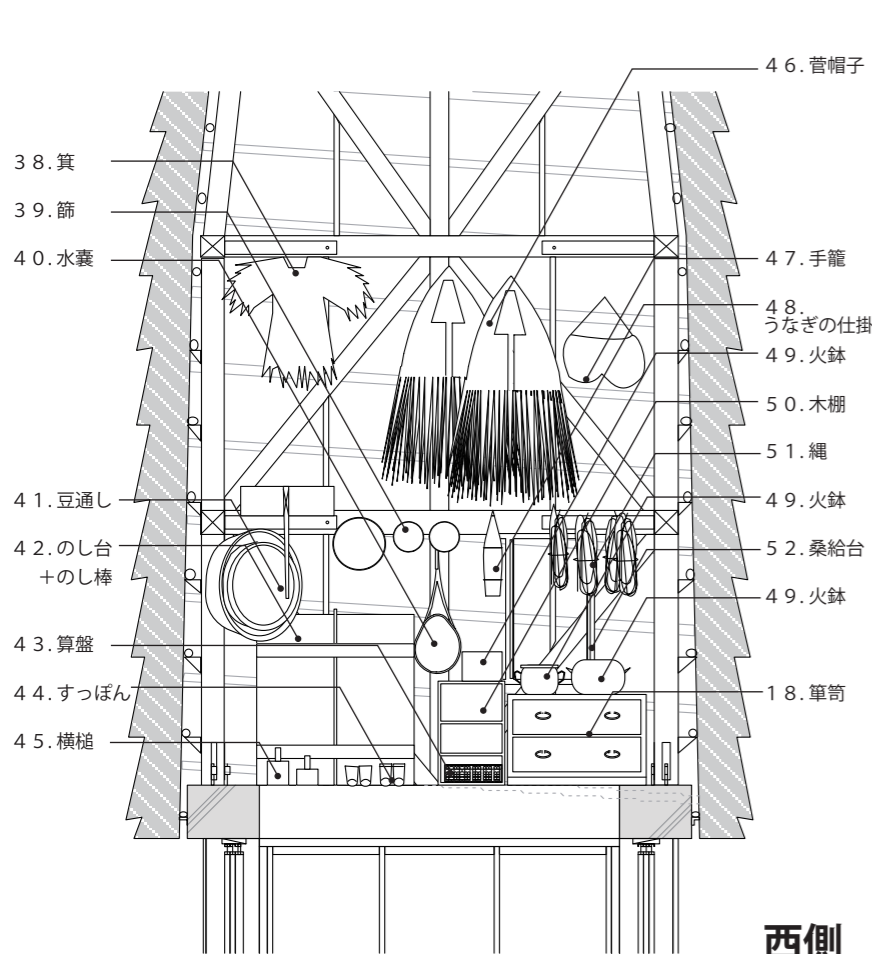


大小各種のテギネがあり、今もなお一部のものは実際に使われている。脱穀精白にも以前は使われたが、これは槌型の横杵にかわっていまは主に搗き混ぜる(つきまぜる)ことに用いる。

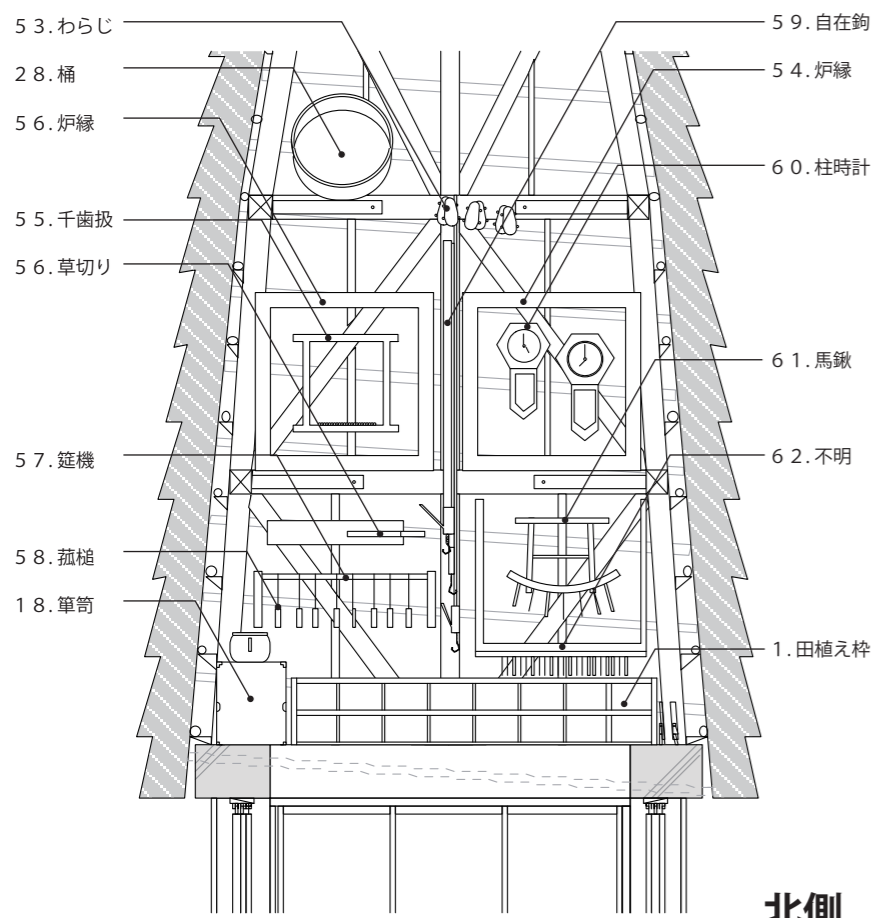
30. 藁すぐり (ワラスグリ)

稲の葉を落として、芯だけを残すときに使う道具。その後さまさまな藁細工がつくられる。

下条地区文化民具説明



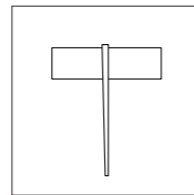
西側



北側

※63～72は1Fで展示

31. 土締め (ツチシメ)

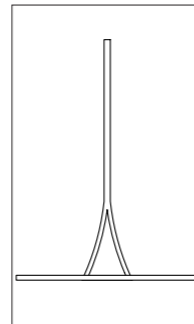


土を打ち固める道具。展示品は自作されたもの。溜池の縁を叩いて水が流れないようにした。

32. 十能 (ジュウノウ)

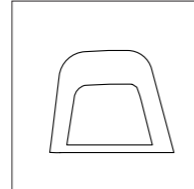
ジュウノウは、竈や風呂釜、囲炉裏などの火や灰をかき出したり、運んだりする道具です。燃えている炭や木を掴みました。

33. えっぷり (エツプリ)



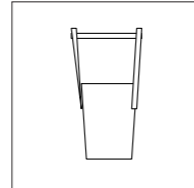
代掻き時に、田んぼの中を平にするための道具。
※田植えの前に荒掻きをする。後に代掻きを行う。

34. 行火 (アンカ)



暖をとる道具。火皿に炭を入れて布団の中に入れていた。又はこたつのように使う場合もある。

35. 桶 (オケ)

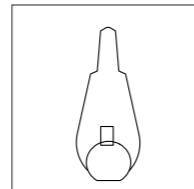


木製の桶。乾燥すると木が収縮して隙間ができるため、水を常に必要とする桶。

36. 釜 (カマ)

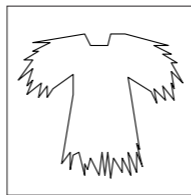
ご飯を炊く道具。金属のツバは熱気を逃がさないため蓋の役割を担っている。

37. ランプ



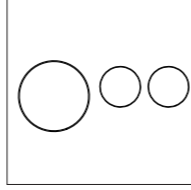
昭和初期に使われていたオイルランプ。芯を上下に動かすことで、明るさを調節できる。

38. 箕 (ミノ)



外出時、立ち作業などに使用していた。軽さと通気性の良さが特徴。

39. 篩 (フルイ)

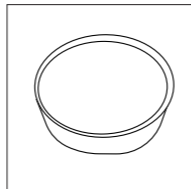


木のワッカに金網を張り、用途に合わせて網の目の大きい物から小さい物までを使い分ける。また大型の四角い物もあった。右から絹篩(キヌブルーイ・キンブルーイ)、胡麻通し(ゴマドオシ)米通し(コメドオシ)。

40. 水囊 (スイノウ)

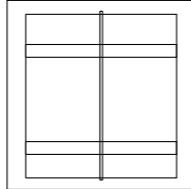
ゆでる際に用い、ゆであがったものを掬い上げる用具。そばやゼンマイなどに用いる。

41. 豆通し (マメドオシ)



篩の一種で、大豆などの豆類を分ける作業時に使われていた。

42. のし台+のし棒 (ノシダイ+ノシボウ)



餅もこねる台として使われているが、家によってはそばを打ったりする台としても使われている。打ち板と面棒のセットになっている。

43. 算盤 (ソロバン)

昔ながらの算盤。

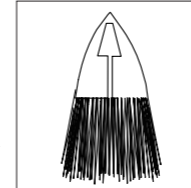
44. すっぽん (スッポン)

スッペズッポン、スッペズッポリ、スッポンなどの呼び方があった。ワラ製長靴である。口の部分をせまく雪の入るのを防ぎ、さらに紐を通してあつて締められるようになっている。

45. 横槌 (ヨコヅチ)

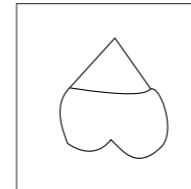
わらを柔らかくする為にたたく槌。ワラタタキツチとも呼ぶ。

46. 菅帽子 (スゲボウシ)



雪の日の外出にかぶる。頂部は折り曲げた状態になっている。

47. 手籠 (テゴ)



藁を編んで縄をつくり、さらに縄同士を編んだ靴。

48. うなぎの仕掛け

川沿いの集落ではよく使われていた仕掛け。

49. 火鉢 (ヒバチ)

炭火(すみび)を入れて手先を温める暖房具(だんぼうぐ)。

50. 木棚 (きだな)

おちょこや、小さな皿が収納されていた木製の棚。

51. 縄 (ナワ)

稲藁を編んでつくられたもの。

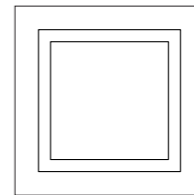
52. 桑給台 (クワクレダイ)

蚕棚から蚕籠を引き出し、クワクレダイの上に置いて桑の葉を与えたり糞を取る道具。蚕籠にはカクザ・マルザがあり、クワクレダイには折りたたみ式と回転式があった。

53. わらじ (ワラジ)

外の輪っかに縄を通し、縛って履く。

54. 炉縁 (ロブチ・ロエン)



囲炉裏の縁。江戸時代から建つ家に大切に保管されていた。

55. 千歯扱 (センバコキ)

木製の台木に鉄の歯をくし状に並べて固定し、歯と歯のすきまに稲や麦を差し込んで扱脱穀用具。「コバシ」とも呼ばれている。刈りとった稲束をはざにかけて乾かした後、穂がついている方を鉄の歯にさして、手前に引いてもみを落とす道具。

56. 草切り・押し切り (クサキリ・オシキリ)

草切りは押しして切るの押し切り、ハゴ切りとも言われた。農家にとって万能の道具で一家に一台はなくてはならない道具だった。牛馬の餌にするハゴ切り、堆肥を作るときのハゴIの切断など用途はたくさんあった。

57. 筵機 (ムシロバタ)

ムシロバタは稲わらを編んで敷物を作るときに用いた。筵は用途が広く、収穫物を置く敷物にしたり、カマス(二つ折りにして作った袋)にして穀物・塩などを入れたりした。所有者はすだれをつくっていた。

58. 菰槌 (コモツチ)

タワラ、コモなどを編むとき縦糸をこれに巻く。コモツチは編むものの材質、編み目の広さにより、大きさまざまなものがある。編み目の細かいものは、小形を用いる必要がある。

59. 自在鉤 (ジザイカギ)

ジザイカギは、吊るした道具の高さが上・下自由に調整できる道具。むかしは農家の囲炉裏には必ず一つはある道具で、自在鉤のサヤが竹製、木製、鉄製のものと種類も豊富にある。

60. 柱時計 (ハシラドケイ)

ドイツでつくられた柱時計も展示。

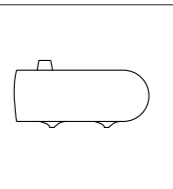
61 馬鍬 (マグワ・マンガワ)

小型の作りであるが、牛馬用のもの。耕耘機を導入するまで、10数年前まで用いた。

62. 不明

ゴザを編む道具。一部を展示。

63. 湯たんぽ (ユタンポ)



陶器でつくられた、昔の湯たんぽ。

64. こたつの網

火を焚いていたときのこたつの網。

65. 田打ち車 (タウチグルマ)

夏場に稲田の草取機で、一丁押しと二丁押しがあり、草を取ると共に土を返して日光の吸収を良くし稲の生育を図った。田の草取機(たのくさととりき)とも呼ばれる。

66. 教科書 (キョウカシヨ)

昔の学校の教科書

67. やかん

鉄製のやかん

68. おぼん

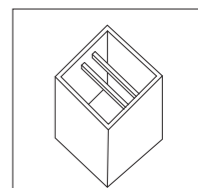
69. ちゃぶ台 (チャブダイ)

折りたたみ式のちゃぶ台

70. とっくり

お酒の入る容器。十日町酒造と記されている。

71. 豆腐の型



豆腐を作る際に入れる型。

72. 小ぼうき